



“わたしらしい” 働き方～若年性認知症の人の可能性～

2024年11月16日 世田谷区若年性認知症オンライン講演会

特定非営利活動法人 マイWay 渡辺 典子（川崎市 若年性認知症地域支援推進員）

- ◆運営母体：NPO法人 2012年法人認可
- ◆事業開始：2013年1月
- ◆所在地： 神奈川県川崎市高津区

<障害者総合支援法に基づく福祉サービス事業>

- 就労継続支援B型事業 津田山
- 就労継続支援B型事業 たかつ
- 就労定着支援事業
- 計画相談支援事業

<川崎市委託事業>

- 若年性認知症支援コーディネーター事業
- 若年性認知症社会参加体制整備モデル事業
- 障害者相談支援センター事業

はじめに

若年性認知症の人の多くは社会生活において現役世代のため、失職による経済的困難や日常生活でも工夫が必要になり、これまで家庭や社会で担ってきた役割をそのまま継続することが難しい人もいます。反面、「認知症であっても働きたい」「誰かの役に立ちたい」との思いは強く、活躍の場が求められている。

私たちは2013年、家族会から60歳になる男性を紹介されたことをきっかけに「就労継続支援B型」障害福祉サービスにて若年性認知症の人を受け入れ、ともに“はたらく場”を作ってきた。

現在は「若年性認知症支援コーディネーター」～「若年性認知症地域支援推進員」として、また『相談』＋『はたらく』＋『居場所』の機能を持つ認知症のある方のサードプレイスとしての役割を担っている。

働く場としてのスタート

就労継続支援B型 定員10人（サードプレイス）／20人

環境を整える

障害種別を問わず、一緒に働く仲間としての受け入れ
認知症サポーター養成講座 開催→職員・利用者ともに学ぶ
RUN伴（普及啓発イベント） 参加

支え合う仲間

社会人としての姿勢→学ぶ姿勢を生み出す
忘れてしまうこと←躊躇なく伝える
お互いに支え合う存在に

活動を続けていく中で

本当に必要なこととは・・・

ご本人の思い・ご家族の思い
マイWay以外の時間について
相談できる場所・人の重要性

2020年～『若年性認知症支援コーディネーター』として

“働く” から “はたらく” へ

認知症になっても、ではなく、なったからこそできること
感じること、やりたいこと



それぞれにとって自分らしくいられる **サードプレイス**へ

川崎市の若年性認知症に関する相談体制

2020年 4月～2024年9月 若年性認知症支援コーディネーター 1ヶ所



2024年10月～
若年性認知症支援コーディネーター 2ヶ所
若年性認知症地域支援推進員 1ヶ所

神奈川県川崎市



その他の相談窓口として

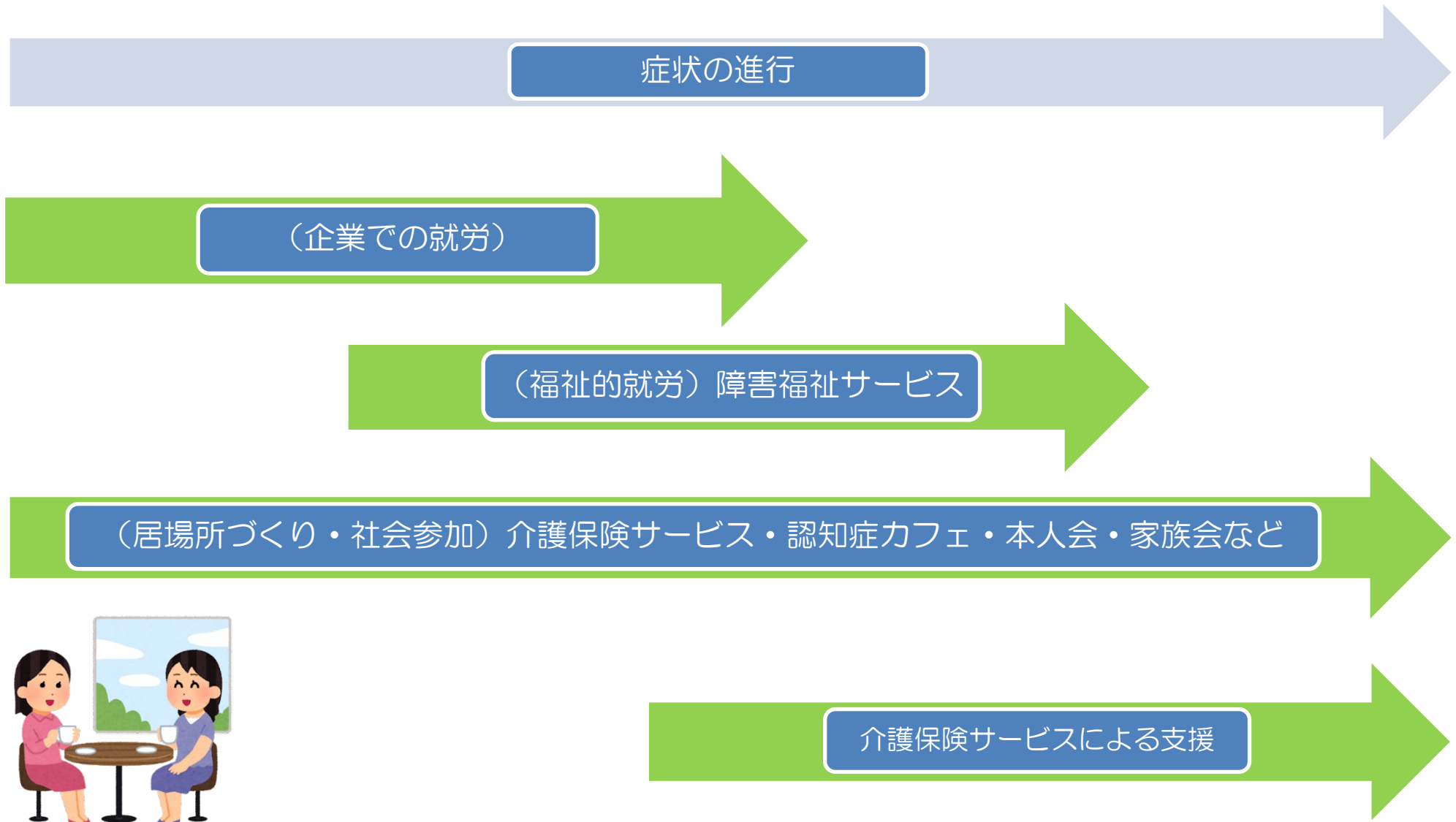
認知症疾患医療センター 4カ所
認知症コールセンター ～サポートほっと～
認知症訪問支援事業 など

厚生労働省の2018年度調査で、人口10万人あたりの若年性認知症の有病率は50.9人。川崎市では、約450人と推計される。

認知症高齢者との違い

- 発症年齢が若い
- 男性に多い
- 初発症状が認知症特有のものでなく、診断しにくい
- 異常であることには気がつくが、受診が遅れる
- **経済的な課題が大きい**
- **主介護者が配偶者に集中する**
- **時に複数介護となる**
- **家庭内での課題が多い（就労、子供の教育、結婚など）**
- 社会的な課題がある

若年性認知症の人の就労・社会参加



なぜ、障害福祉サービスなのか？

介護保険サービスで受けられない外出支援や就労継続支援などは障害福祉サービスを利用できる。

39歳以下の方は介護保険サービスを利用できない。

認定度によっての利用制限がないため、利用者主体で利用日数を決められる。また、1日の利用時間も融通がきく。

若年性認知症の方の「働きたい」というニーズに対して、介護保険サービスに繋がる前の『空白の期間』で障害福祉サービスの利用が大きな役割を果たしている。

診断後、休職中のAさん（58歳）の事例

メーカー勤務のAさんは1年ほど前から物忘れをすることがあり、仕事に影響が出ていた。会社から勧められ、受診をした結果「若年性アルツハイマー型認知症」と診断。会社からは休職扱いで1年半在籍を続けることが出来ると言われた。自宅に引きこもってしまった夫を心配した家族が相談。本人は面談の際に「働きたい。せっかくなら何か役に立つことがしたい」B型（サードプレイス）の活動に興味を持ち、現在は週5日の通所、週末はジムに通うなどの生活を続けている。

※休職中の場合、会社側の許可があれば就労継続支援サービスの利用は可能となる。

発症後、自宅に引きこもってしまったBさん（55歳）の事例

NGOを運営しながら、海外でも活動をしていたBさんだったが、発症後、活動を縮小して役割を失ったことで自宅に引きこもるようになってしまった。心配した夫が相談。何回かの見学や体験利用を経て、現在は週2日の利用を楽しみにしている。

「働く」というよりは「自分に何か出来ることがあれば嬉しい」今年ボランティア活動を復活させて、“誰かの役に立てる”ということを楽しみの1つにしようと話をしている。

※「働く＝賃金労働」ではなく、さまざまな「はたらきかた」を考えていくことが大切。

若年性認知症本人のつどい『これから会議』

2020年年9月～開始 （毎月1回 第3金曜日）

マイWay事業所内でのおしゃべり会や“大人の社会科見学”などの外出イベントをメンバーさんと一緒に企画している。

過去ばかりふりかえらず、今、そしてこれからどうする？
メンバーさん同士でおしゃべりをしながら、一人ひとりの
やりたいことを実現させていく会。

オンラインかぞくの会『ゆるるか』

2021年年1月～開始。 （毎月1回 第4金曜日）
オンライン（zoom）での開催。

参加者は、ご家族と時々ご本人も。
支援者はオブザーバー（家族会・五島シズさん・認知症の人と家族の会等）

コロナ禍で始めた「オンライン」今では毎月の楽しみになっている方も。
毎回テーマを決めずに、その日に出た話題や相談ごとを、参加者で共有しながら話をしていく。遠方の家族が参加できることもメリット。
時々のオフ会も楽しみの1つ。

メンバーさんとともに

認知症になってもわたしはわたし
自分のやりたいことを、これからもやり続けたい

“認知症”を受け入れるには時間がかかった
仲間の存在が心強かった、みんなスゲーな！
予防？そりゃ、出来るならしたいよ
なってしまった自分を否定できない
ここに来なかったらどうしていただろう
刺激や会話、少しの「～ねばならない」があるといい
自分も誰かの・社会の役に立ちたい
同じ状況の人に少しでも早く教えてあげたい



ある人は認知症と診断された際に「ほっとした」と言った。「モヤモヤの理由がはっきりしたから」と。ただ、明日からどうしたら良いのか、誰に相談したら良いのか、誰も教えてくれなかった、と。

診断後すぐに必要なことは身体的なケアよりも、心理的、精神的、社会的なサポートではないか。そして仲間やパートナーとの出会いによって、その人のその後の暮らしは大きく変わるのではないか。

まだまだ社会資源が少ない現状の中、「はたらく場・サードプレイス」として果たす役割の意味を、今回改めて認識することができた。これからもメンバーさんの想いととともに、チャレンジを続けていきたい。



ご清聴いただきありがとうございました